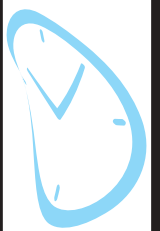


とまの玉手箱

博物館からのメッセージ



第69回

唐獅子牡丹

牡丹の季節になりました。「花王」とも称される大輪の美花は、四季の草花の中でも、ひととき豪華なイメージを誇ります。

日本の文様には、大別して、きらびやかで力強い唐様と、優しい和様とがあります。唐とは、和の「我れ」に対して「彼れ」のこと。外国風の……、という意味で、中国や朝鮮から伝わってきたものをいいます。日本の文化は、常にこの「唐」と「和」のふたつが両輪となって、展開してきたのでした。

牡丹は、富貴を意味します。いつまでもなく中国から伝えられた唐様文様で、植物文の王者といつてよいでしょう。

一方、唐獅子は、「唐」が冠せられることからわかるように、唐様の動物文の代表格です。猪、鹿と区別するために、日本にはいない外国のシシという意味で、こう呼ばれたのでした。

中国では、鎮墓獣として陵墓の墓道に並べられたり、守護獣として仏教尊像の傍らに配されました。

いかにも実際のライオンを写したに違

ない写実的な像から、勇猛さが誇張されて、想像上のパワフルな動物と化したものまで幅があります。

この霊獣としての獅子の造形は、私たちの身近にも見ることができます。神社の参道の左右に配される一對の狛犬がそれです。

正確にいうと、現在、狛犬と呼んでいるのは、獅子と狛犬のセット。口を開いた方が獅子、口を閉じたのが狛犬です。

ところで、獅子にはもう一つの重要な役割がありました。仏教の文殊菩薩が騎乗する獅子です。

ここで、獅子と牡丹とが結びつくことになります。この組み合わせは、取り合わせがよいことのとえとして用いられますが、出典は能の「石橋」にあるように思います。

出家渡唐して仏跡を巡歴する寂昭法師は、中国の清涼山を訪れます。生身の文殊菩薩が住むという聖なる山です。底知れぬ谷に掛かる細い橋があり、向こうは文殊菩薩の霊地。そこに獅子があらわれて、盛りと咲き誇る牡丹に舞い戯れます。

この曲は、そうとう人気があったらしく、歌舞伎にも引き継がれて演出が工夫され、人々に親しまれました。かくして、獅子と

牡丹は切り離せないものとなったのです。私たちになじみの深い文様も、その来歴を訪ねると、思いのほか、悠久の歴史をもつています。

(彦根城博物館学芸員 齋藤 望)

写真の半切は、彦根城博物館テーマ展「大口と半切―井伊家伝来能装束から―」で、5月10日(金)から6月4日(火)まで展示します。



半切 紅地牡丹獅子文様 (彦根城博物館蔵)